

秋夜長物語について

齋藤清衛

文芸の起原について、それは韻文であるか（和歌の類）散文であるか（物語小説の類）戯曲であるか（演劇の類）——と云う問題は文芸美学の問題であつて容易に解決できない、各国の民族性や各環境の差別によつて各種各様の実例があげられるだろう。しかし国文学に係わるかぎり、散文本文の文芸が固字で多く書かれ出したのは西紀九世紀以後と見るべきである。物語の始まりを、文芸史上、伊勢物語か或は竹取物語であると看るのはほとんど常識である。少くとも中古平安朝時代はわが文芸史上、珍しく物語小説の類が多数に作られ、世界文学史上でも稀な大作源氏物語が完成したことは一種の驚異である。なお、当時の社会に説話伝説の欣ばれたことは、中古中世にわたり、大和物語・多武峯少将物語、往生要集・江談抄・今昔物語・宇治拾遺物語、十訓抄、沙石集などがそれぞれに書進されてゐる。いわゆる軍記物も、多くフィクションであり、室町時代に伝誦され、書きとられた作品の数は、想像するに数百種以上に達するであろう。今昔物語の類は、口誦乃至説話物に限られていないが当時あれだけの宏願のものを作りあげた編者の努力は、たいした

ものである。今昔物語には、唐物語のように、大陸支那の逸話、伝説もあるが、大半は本朝部でその中には民間伝誦と思われるものも少くない。明治時代東京大学で芳賀博士が伝説研究に着眼されたことは、民族学者も知るところであり、大正時代島津助教教授がその学統を繼いで、「近古小説新編」を編し、更に義経伝説の研究の功績を遺したことは人皆知る通りである。その後「室町時代物語集」（古典文庫）「室町時代物語」等の刊行によつて、特に室町時代の未刊本が活字化され、研究者に便宜を与えてくれたが、その間には口誦中心か創作かの区別のできかねるものが多い。かつ内容がお伽草子のように幼稚な空想物であり、縁起物のように信仰本位のものであつたりして、文芸的物語としては低級のため、横山重、太田武夫（室町時代物語集の共編者）等数名のもの以外にはこれと云う専攻者がいない状態である。

ここで、「秋夜長物語」の批評に移つて見たいのであるが、作者成立年代不明、一卷の刊本の終に「寛永十九年五月、日安田十兵衛」とあるだけのもの。統群書類從（巻三一）日本文学全書（第十

九樹)に編入されたのが切掛となり、「困文全書」「困文大観」「日本文学大系」等に採入れられることとなったが、従来研究らしいものはほとんど発表されていない。叡山東塔の桂海律師に恋された美少年(児)実は石山觀音の化身であったということになっているので、かれが物語の主人公にされているから、この種の物語を類別として「ちご物」と呼ぶのは当っている。「ちご」の意は、言語に書かれているように、(一)乳子であり、(二)稚児でもあるが、物語では特に、寺院に召された童児、即ち喝食をさすのが一般である。

伊勢貞丈は「古代は童子も中剃なく髷まげを結ゆひて、後ろへ長く垂らし置きたり。髪かみの先をは肩の下辺にて切るなり。是を喝食姿と云ふ。又、髪かみの先を切らず婦人の如く下げ髪にしたるあり。是を児姿こゝろと云ふ。両様なり。武家にては、多くは先づ切るなり」(「秋草」)と解説しているが男性といえどほとんど姿は女装に近く、桂海は西山に修行を積んだ身ながら、この梅若という児を一見して以来、同性愛に悩み初めるのである。物語の中に、夢に現れた児につき、

錦の戸帳のうちより、容顔美麗なるちこの、いはんかたなく見えたるが、たち出て散りまがへる花の木蔭にやすらひたれば、青葉がらに縫物したる水干の遊山に花ふたたびききて、雪の如くにふりかかりたりけるを、袖につつまながらいづちへ行くとも覚えぬに、暮れゆく色に消えて見えずなりぬ

児を恋する心の中に現われた幻覚であるが、源氏物語などに描かれた夕顔その他でもあるような物はない姿である。鎌倉室町時代は、武家乃至僧侶の勃興時代で、紫式部や赤染衛門などに対抗できる團秀作家もいなくなってしまう。伊勢物語や源氏物語は、ひたすら憧憬の物語となつて、大小の模倣作が次々に現われた。多くの公家は、源氏や足利氏の勢力下にあり、わずかに詠歌、管絃、昔物語を読む中に、人生の慰めを満たしているのである。

当然ここに考えられるのは恋愛の問題であるが、意志強健を立看たてみ版とする武人、四教三徳の奥儀を極める天台高僧たちにせよ、人間の本能である性欲を完全に超越することはできない。男性が美麗な少年を愛する同性の愛は、すでに前期の文学にも見られるが、その流行が著しくなつたのは、鎌倉時代末期から室町時代にかけてのことである、惟うに中古平安朝時代の女性が、几帳の中で恋愛物語を眺みふけていたように、南北朝時代の武士、僧侶は、児物語を耽読したものだらう。東鑑によると、鶴岡八幡宮の神楽には、殊東京部から郢曲にすぐれた児童を招き、梶原平次が横笛を吹く垂髪とちかみの児に曲をあわせ、山山次郎が今様歌を唱つたなどの記事が見えている(元暦元・十一・六)また沙名集の中にも次の一節が出ている。

或る藏人なりけるが、子を山へ登せたりけるを里へ下りたる次に
寺法師すかしとりて寺におきてけり。山僧此の事を聞きて我が山

は他寺の児をこそとるべきに、寺法師にしもとられぬること口借しとて、大衆怒り罵りて、先比の師の行人に事の子細を問ふに、児どもの里に久しく候ふ事常の習ひと存ずる計也、三井寺に候らん事つやつや受け給はりおよばず、先づ状を遣はして見候はんとて、紙と硯を取りよせて、かくぞいひやりける

山の端に待つをばしらで月影のまことや三井の水にすむとは
寺法師これを見て感じて、秀歌返事なしとて別の子細におよばず
山へ送りけり(巻五、下)

前話は武人間のこと、後話は僧侶間のことであるが、さすがに性欲の内面は、殺されていないが、一人の美人を教人の男子がわがものとしようと争うように、武士僧侶の間に容貌美麗の児をわがものとする争はたえず繰り返されたのである。また、沙石集の話のように、喝食の奪いあい、延暦寺と園城寺(三井寺とも)の法師の間に演ぜられた。延暦寺は比叡山にあって天台宗總本山、伝教大師最澄が延暦時代草薙を結び、やがて根本中堂を創建し、自作の葉師佛像を安置したに始まること衆知の事実である。此に對し園城寺は、比叡山の麓大津にあって、同じ天台宗ではあるが寺門派の總本山であつて天武天皇十五年落成した崇福寺を莊園城邑の義に依つて、園城寺に改名後、貞觀時代高僧円珍の計画により延暦寺の別院とされたものであつた。しかし円珍と円仁との両門徒の擧執が中世時代に連る延

暦寺と園城寺との対立を引起したものと云つてよく、山(延暦寺の通称)寺(園城寺の通称)共に僧兵を貯えるに到つて、ますます鬭争が絶えなかつた。その激しくなつた初めは、永保元年(一〇八一)山徒が日吉神社使の件から山を降り園城寺を焼払つた時代からであり、保安二年、保安六年、応保二年(一一六二)等統いて山徒の暴逆にあい、その後平氏の怒をうけて焼かれ、順徳天皇建保二年(一二一四)龜山天皇の文永元年(一二一六)花園天皇元元年(一二一九)等にも山寺対立の史実が遺されている。更に細川定禪の陣所となつたがために新田義貞の兵火に罹るなど大津に建立されたがためにいよいよ不利の歴史をかさねてきたのである。

さて、秋夜畏物語は、主として園城寺(三井寺)と延暦寺を背景にとり、梅若という容貌美麗の喝食の奪いあいから、兩者戦鬪に到ることをテーマにしたもので、嘉吉(元年は一四四一)や明応(元年は一四九二)の奥書のある写本が遺つてるところから察するとその以前、応永(元年は一三九四)永享(元年は一四二九)時代までに書かれた兎物踏だろうと推定される。作書も成立年代も不明瞭である、使用語句、文体等から察すると、太平記などと同様に、南北朝から程遠くない時代、文筆を心得た某の半ばは史実により半ばはフィクションを加えて物語を書きあげたものかと察せられるのである。執筆の動機につき、

近比耳にふれしことの、あまりに哀にもた子とかりしかば、面々に杭をそばたてたまへ、老のねぎめに、秋の夜の長物語ひとつ申し侍らん

と述べられているが、「秋夜長物語」という題名は、ここから出ている。作者は、聞き伝えられた一哀話として扱っているのであるが園城寺の僧侶か、園城寺関係の文人のものの戯筆であることが知られるのである。

それ春の花の樹頭にのぼるは、上求菩提の機をすすめ、秋の月の水底にくだるは、下化衆生の相をあらはす。天いふことなくしては、物々皆これをしめす。人とこころありては、何つとめざらんや。もし人ありて、人間の八苦をみて、穢土をいとふ時は、煩悩即ち菩提となる。天上の五衰を聞きて、浄土をもとむる時は、生死即ち涅槃となる。

これは冒頭の一節であるが、「上求菩提」とか人間の「入苦」とか、更に「煩惱菩提」という用語の多いことでいかに仏教に関心を深めて執筆されたものであるかが判る。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」を筆頭とする平家物語を初めとして、中世文学には仏語が到るところに使われている。法然、真覺、日蓮、道元などが、時に応じ新仏教を唱導した結果でもあろうが、西洋の中世にキリスト教がひろく普及したように、神仏両面に対する國民の信仰心が隆

まってきた。秋夜長物語の構想は、比叡山の「ある時は忍辱の衣の袖に摂取の慈悲をつつみ、ある時は碎俗の刃のうへに忿怒の勇銳を振ふ、誠に真俗の依頼、文武の達人」であった膽西上人即ち桂海律師が、石山寺に參籠し、夢に現われた美麗の喝食にうつつを忘れ心のやり所もなく一時は隠遁の計画までも立てた。しかし兎の美貌が忘れがたく、再び石山觀音に詣で祈願しようと、三井寺の側をゆくとその聖護院の御房に夢で見たままの兎姿の梅若に遭遇する。梅若に仕侍している一童の取持ちで、上人は薰物人の練りぬき・唐綾・浮線緞等の小袖などを贈り、恋の悩みを訴える。恋歌恋文の交換ある状況は、伊勢物語源氏物語の男女関係の恋の敘述と異らない。物語の背景が琵琶湖畔であり、阪本、戸津、大津、志賀幸崎などが地名とし出されてまことに艶美である。最初の会合の場面は

涙と共に杭をかはしまの、水の流もたえず、猶契るべきむつことも、まだつきなくも閑寒くして蘭房の夢さめ、連理の花別れて止むがたければしの小雀のふしに明けぬと告ぐる鳥の音も恨めしく、おのがきぬ／＼冷やかになりて立ちわかれなどする云々とあつて何となく近世の淨瑠璃の格調をさえ思わす。かくして、もともと梅若は京の花園大臣家を、わが里としたのであつた身分のため、一時身を隠した上人の行末を案じ、童を伴れ野崎の松の木蔭まで辿りつく。と、そこに山伏に擬した天狗が二人を伴れ去り、釈迦

獄にある石窟に押込めてしまった。梅若を奪われた園城寺の僧兵は先ず大衆五百余人三条京極の花園邸を焼払い、三千余人の僧兵敵山勢を防ぐため如意越を堀り切り、麓に防木を造り、その築向に供えた。しかし上人（桂海）等五百余人の僧兵が攻め下つてきたため、園城寺附風の坊三千六百余すべて兵火で炎上してしまつた。このあたり、太平記その他の軍記物に多い僧兵間の戦乱に類している。兵数を三千とか四千とか、やや誇大して示すのは一般軍記物に見られる筆跡である。石牟に籠められた梅若は、たまたま天狗連が山寺の争乱を語るを聞いて悲しんでいると、大蛇の変化であつた八十ばかりの淡路の老翁が現われ、その石牟に押し込められながら梅若の出した涙を滔々とした大水に変えて一挙に牢を打碎き内裏の旧神泉苑に逃らすことができた。その後梅若は生家の花園邸や、思い出のある園城寺を訪ねたがすべて焼野の原となり、聖護院、石山寺に逃れかね、童と共に遂に勢田川に入水して自殺する。上人はこの悲惨さを知り、船を出して河流をあらちろ探し、漸く供御の瀬附近で児の死体を見出したことができた。「律師（上人のこと）は顔（註、梅若の亡骸）を膝にかきのせて、天に仰ぎて泣きかなしむ」云々以下の悲哀の描写も、室町時代物語にしばしば見られる類型である。その後上人は山を降り、西山の岩倉に庵を結んでいたが益々世をあじきなく感じ最後思い出に足を引いて園城寺焼跡に行き附近の新羅

大明神に詣で通夜したところその夜の夢に、法務大僧正らしい高僧が、四方輿に乗り衆僧を率い、束帯を着、甲冑などもつけた随兵に守られている行列を見た。夢の中でそれは何者かと訊くと東坂本の日吉山王との事、大明神もその大行列を拝していられる。園城寺から見れば怨敵なのであるから、いかにも不審すると、「それ神明仏陀の利生方便をたるる日、彼を召して福を与へ給ふも冥冥の本意にはあらず、これを非して罰を行ふも、慈悲のおもかりし故なり」とか、また寺門の焼けたるも、濟度の方便なり」とか聞かされて、この事件について桑門の人が尊いとして東西から集まり、東山に雲居寺という御堂を建てるに到つた。物語は「人間の行末、尊きも卑しきも、後生を心かけ給はんこと肝要とこそ申し伝へけれ」の一句で結ばれている。すべて児物語を延暦寺、園城寺の争いに掛けて構想した一物語である。

ここで、筆者と執筆動機とを考えて見るに、延暦寺（山）園城寺の対立を傍観している一文人が、たまたま、この梅若事件に類した児争のことを耳にし、平家物語、太平記、義経記、承久記等の敘述に暗示をうけ筆を採つたものではあるまいか。山か寺かの一方を殊更推奨してはいないが仏教信者であつたことは前述もした通り。但し、延暦寺及び比叡の事はほとんど書かれず、園城寺や石山寺やにおいての敘事が大半をなしているということは、作者は三井寺あた

りの法師でなくとも、理窟湖畔に居住していた一文人であつたためかもしれぬ。上人は自らを反省し、最初の別離をして帰山しようとした場面もあるが、

……又こそ参り候はめ。うれしくも通ふ心のしるべとならせ給ひぬるものかなと、童にいとまごひつつ律師、山へ皈りけるが、足あゆみではみかえり、二足あゆみではたちとゞまりしける程に春の日ながしといへども、程近き坂本の里坊まで行きつかで、日暮れにければ、百津の辺にありける殖生はたよの小屋にぞとゞまりける。夜もすがら思ひあかして、あしたになれば、山へ登らんとて、庭まで出でたれども、千引の紐を腰につけたるが如く、我ならぬ心にひきとゞめられければ、又引きかへして、大津の方へぞあこがれ行く。雨しめやかに降りければ、笠笠うちきて、旅人の姿に身をやつしつ行くとところに、傘さしかけたる馬乗りの道にて行きあひたり。誰ならんと見やりければ、梅若のなかだちせし童にぞありける……

と云うように敘されている。湖畔の情調を巧みに生かした描写である、梅若と童とが、山寺の戦鬪後、園城寺炎上と隨退の跡を見たところも、

……目もあてられぬ名残惜しみて、その夜は新羅大明神の御拜殿に、湖水の月をながめて泣きあかしつつ聖護院はもし石山にや

御座あるらんと、尋ね行きたれども「これも御座なし」と申せば「童侍らば、今宵は参詣の人の体にて本堂に御座候へ、それがし山へまかり登り候ひて、律師の御坊を尋ね申し候はむ」と申しければ……

と、石山を背景に童と梅若との交渉が記されている。

つきにこの物語の文体であるが、おおむね軍記物、特に太平記の筆致と類するものが著しい。次は上人(桂海)が僧兵を率い園城寺勢に攻めかける敘述である。

十月十四日、中の申の日にあたり。これに過ぎたるよき日あるべからずとて、院々堂々の勢を七手にわけて、又卯の刻におしよする。あるひは漫々たる志賀辛崎の浜路に、駒に鞭うつ衆どもあり、あるひは渺々たる烟波湖水の朝なぎに、舷に棹さす大衆もあり。思ひ思ひに寄せけるその中に桂海律師は、この盪觸、しかしながら我身より事をおこす災ひなれば、人より先に一合戦して、骸を戦に止めんと思ひ、過ぐりたる同宿若党五百余人、まだしのめも明けぬまに如意が谷よりぞ寄せたりける。

かく誇大的に敘する筆致は、軍記物的の格調を帯びている。その他に、対句の目立っていることも共通でこの一節の中にも「あるひは漫々たる……あるひは渺々たる……」と云う句法が見える。巻頭から、別の対句を抜き抜き掲げて見ると

○春の花の樹頭にのぼるは……秋の月の水底にくたるは……

○天いふことなくしては……人ところありては……

○人間の八苦をみて……天上の五衰を聞きて……

○内には玉泉の流を酌みて……外には黄石が道を踏みて……

○ある時は忍辱の衣の袖に……ある時は神伏の剣の刃のうへに……

○その心の内にうごき、……宮の外にあらはれ……

○春におくれたる一本の花をみては……秋の月のくまなきには……

かかる修辞の例は全巻に限りなく用いられている。その他、また「律師山へ飯りけるが一足あゆみてはみかへり二足あゆみては立ちとゞまり」とか「八方やぶりの武蔵厨、三町つぶての教一房」とか、教詞を並列して、特殊の文脈を出す場合などもある。これらは、何れも作者の好む修辞法ともいわれるが、總じて中世以後に普及したものである。なおその他「ねりぬき、からあや、ふせんれう」「よせ手には習禪、前司くわつさう院、すきしやうさいせう、こんりん院、させんせうきやうめうくわん院、杉本山さいれん院」と云うように筆はやに同類のものを並出さすという技巧なども、漢詩文の影響をそれとなくうけているかと思う。

仏前にむかへば漢の李夫人反魂香の煙にむせびて、身をこがし給ひし武帝の御思ひも身にしられ、空山の花はこるびて雲底によれば巫山の神女が雲となり雨となり夢ののちの櫛にたづきもしら

ず欺き給ひけんやうたいの御涙もよそならず……

と中国の故事来歴を引証するなど概ね、中世文人の目立った手法である。当時、京都や鎌倉に多数の神僧が渡来し、唐宋文学が比較的ひろく理解されるようになった世相とも合せ考えられるところである。諸句の結語も、三段活用の動詞か、「けり」「たり」「ぬ」の助動詞が多く、源氏物語模倣の中世小説とは、全体の筆調を異にしている。

以上を要覽するに、秋夜長物語は、例えば中世作品の中の「方丈記」「徒然草」などに比較すると、思想的にも構想にも一段と劣っていることは認めねばならぬ。国文学史の中で中世の佳作として取上げられぬ理由もここに考えられるが、しつかり形態を露えた尼物語の一作品として軽視すべきではなからう。王朝物語の技巧を部分的に摘用している点、山寺の争乱にかこつけて仏教信仰の意義を解説している点、僧兵の戦闘を述べた点、時代につき虚想ながらも後堀河の院の御宇の關西上人の事件として表面史実らしく執筆している構想など、研究問題が多様に遺されている。